

CHOSHI (第11話)

(令和3年 9月)

9月、約1ヵ月に渡って発令された緊急事態宣言が解除され、10月初旬に関東大会を行うことになった。しかし、茨城県だけは独自の方針で学校間の部活が行えず、県選抜の練習会も実施出来なかった。

9月26日(日)7:45～笠間市民球場でやっと第1回目の練習会を行うことが出来た。そして大会は10月2日(土)から埼玉県で行われた。

茨城選抜チームは、他県に比べて合同練習の機会がなかったのに関わらず、決勝トーナメントまで勝ち進んだ。しかし、川口は約1ヵ月の休校があったので、体の感覚を取り戻すのが大変だった。練習会では技術の高さを示すことはできたが、大会での実績が無い川口に登板の機会は巡って来なかった。

決勝トーナメントは10月10日(日)。10月9日(土)に第2回練習会が茨城県常陸大宮市で開催された。しかし、この期間は休校の影響で延期した清真の前期期末考査が行われる週であった。

押見は川口のご両親と連絡をとり、10月9日(土)の練習会の後、テストを受験するために常陸大宮と清真の送迎をお願いした。川口の自宅は銚子にあるので、数百km以上の距離をご両親は何度も行き来した。

押見は川口に大会前に一つだけアドバイスした。『後ろの守備が不安の中、投げているのでどうしても三振をとりにいってしまう。すると力みが出て、ボールが高くなったり、シュート回転したりする。関東大会になれば、三振はとれない。低いボールを投げて、ゴロを打たせ、後ろに守ってもらった方がいい。』

10月10日(日)大宮運動公園。関東大会準決勝。茨城選抜は4-3サヨナラ勝ちしたが、川口は出番がなかった。直後の決勝戦。相手は西東京選抜。

初回、茨城選抜は2点を先制したが、3回に2点、4回に2点を取られて逆転された。午後2時58分。押見の携帯に県東地区中学野球部顧問の先生達で作っているLINEに写真とメッセージが送られてきた。

『川口登板。』川口は2-4で逆転され、なおワンナウト1塁の状況で登板した。押見は思った。『川口は7月の大会以来、試合で投げていない。約3ヵ月投げていない状態で、いきなり関東の決勝のリリーフでは、普通はストライクが入るわけがない。でも…。』

午後3時16分。『しっかり打者一人を打ち取り、降板。』とメールが届いた。川口は2球で、打者をファーストゴロに打ち取り、ダブルプレーで相手の勢いを止めた。

5回裏、茨城選抜は5点を取り7対4で勝ち、優勝した。川口の登板は僅か2球だったが、試合の流れを変える大切な役割を果たした。関東大会で清真の選手がプレーするのはこれが初めてだった。